

難波西鶴と

海の道

【60】

森田 雅也

前回は「日本永代蔵」貞享五(1688)年刊]巻

六の三「買置きは世の心やすい時」に登場する「小刀屋」という堺に住む「長崎商人」の話でした。

「小刀屋」は、毎年遺言を書いて、後顧に憂いをなくして、1年間力の限り、正直に商売をして一代で大金持ちになった偉人でした。

この人が初めて遺言状を書いた年の遺産総額は銀3貫500目(約700万円)に過ぎなかったのですが、25年後に「くくなつた」といふ息子に譲った遺産総額は銀850貫目(約17億円)に

なっていました。しかし、汚い商売はせず、世間からはとても敬愛された商人でした。

では、この人がどうやって長崎で大金をもうけたか。方法が詳細に書かれています。

彼が長崎に初めて行ったころ、長崎には中国からの交易船がたぐとく来航していました。おそらく、明の遺臣、鄭成功がごく、公海でのテロの危険性が取り除かれたのが、原因だったのでしょう。

中国船の過多なる来航は、輸入生糸や綿の価格を下げました。最も高価な緋綾子一巻の価格が18匁5分

(約3万7千円)まで下がってしまいました。「小刀屋」としては、これが底値の買い時と判断しましたが、手持ちのお金がありません。そこで、懇意な商売仲間10人に、そのもうけの可能性を説明し、1人から銀5貫目(約1千円)を出資してもらい、銀50貫目(約1億円)もの元手を得ることに成功します。

その元手で綾子を買っておいだところ、案の定、翌年には価格が上昇し、銀35貫目(約7千円)ももうけてしまいます。そんな喜びのなか、たった1人の息子がたいへんな生死を彷徨う病になってしまいます。彼は、全財産を投げ出して息子の治療に努めますが、いっこうに快復しませんでした。

そんな時、ある人が才能のある医者を紹介してくれ、70%の快復をしますが、

人情家の「小刀屋」

そこから全快しないので、親せき筋はその医者を見限り、名医と呼ばれる人に診察をお願いしたところ、不治の病とされてしまいました。そこで「小刀屋」夫婦は恥をさらして、もう一度、元の医者に戻ったところ、元氣すぎるほど治癒します。

そこで、医者への御礼を介してくれた夫婦に礼金として相談しますが、その金額について争いになります。「銀5枚(約50万円)」と提示する夫婦に対して、「銀3枚」と値切る「小刀屋」夫婦でしたが、実際の御礼は、銀百枚に加え、真鯛20把、酒一斗樽(二升瓶10本分)、酒肴1箱、無茶苦茶の御礼ですが、この人情あつさが、栄える信用になったのです。商売繁盛には何よりも誠実が大切なのですね。

(関西学院大学文学部文学言語学教授)

誠実な商売で繁盛